

「ラストピース」

第7話

水瀬真理佳

へ登場人物一覧へ

鈴木理菜（18）大学1年生

高橋湊（13）（23）理菜のアパートの隣

人

花村夏凜（18）理菜の親友

市川拓也（18）理菜の親友

西原圭吾（18）市川の友達

成宮翔（18）市川の友達

高橋正雄（69）高橋の叔父

竹内魁（20）（29）高橋の兄

前田聡（40）理菜の実の父親

前田明日香（35）理菜の実の母親

ラリー（6）理菜が飼っていた犬

住民

刑務官

看護師

刑事1

刑事2

担任

男

○刑務所・医務室内

高橋の兄・竹内魁（29）がベッドに横になっている。

腕には点滴が繋がっている。

竹内、白い天井をじっと見つめる。

○（竹内の回想）アパート・竹内家（夜）

T「9年前」

1Kのこぢんまりした部屋。

キッチンでにんじんやピーマン、ソー

セージを細かく切っている竹内（2

0）。

スマホに着信。

竹内（電話）「もしもしお疲れ様です！

……は、火事!?　すぐ行きます！」

と、玄関に走って勢いよくドアを開ける。

外は暗く、しとしとと雨が降っている。

竹内「こんな時に限って雨かよ」

竹内、外にかかっていた傘を持って家

を出る。

○（竹内の回想）住宅街・道（夜）

遠くで消防車と救急車のサイレンが鳴っている。

竹内、雨の中傘をさして住宅街を小走り。

通り沿いの一軒家から飛び出してきた人物とぶつかる。

ぶつかった拍子で何かが地面に落ちて音を立てる。

男はフード付きのカツパを着ていて、顔はよく見えない。

竹内「すみません！」

と、しゃがみ込んで落ちた物を拾おうとするが、地面に落ちていたのは血がついた包丁。

竹内、驚いて見上げると、男の顔が見える。

竹内「もしかして、阿部……？」

男はピクリと反応するが、何も言わずに走り去る。

竹内、男が出てきた家のドアを深刻な顔で見る。

ライトが灯っていて、表札には「前田」と。

竹内、何度も呼び鈴を押すが応答はない。

○（竹内の回想）前田家・玄関（夜）

竹内、ドアをどンドン叩いて、

竹内「入りますよ！」

と、ドアを開ける。

玄関から先には血の痕が続いている。

竹内、靴を脱いでおそるおそる中に入っていく。

○（竹内の回想）同・リビング（夜）

リビングには血だらけで倒れた理菜の

両親・前田聡（40）と前田明日香

(35)、犬・ラリー(6)の姿。

竹内、手前にいた前田に駆け寄り声をかける。

竹内「何があったんですか!? 分かりますか!?」

竹内、前田の首筋に指を当て、口元に耳を寄せる。

脈はなく、呼吸もしていない。

続いて明日香にも同じように声をかけるが反応はない。

竹内、スマホで119番を押しながら玄関に戻る。

竹内(電話)「男性と女性、それから犬が家の中で倒れてます! 血だらけなんです! はい」

○(竹内の回想)同・家の前(夜)

離れた所で煙が上がっており、さっきよりもけたたましくサイレンの音が聞こえている。

近所の住民たちが外に出て炎の方を見ている。

竹内、集団に駆け寄り、

竹内「すみません、ここの住所ってなんですか!？」

と、住民の1人に聞く。

住民、血だらけの竹内を見てギョツとする。

住民「（震えながら）ふ、古諏訪町3丁目の

2の4だけど……」

竹内（電話）「古諏訪町3丁目の2の4です！ はい！ すぐに来てください！」

と、電話を切る。

住民たちが不審な目で竹内を見る。

竹内、自分の体を見ると、全身に血がべったりついている。

竹内「違うんです！ 家の中に入ったら人が倒れてて……！」

と、説明するが、住民たちの疑いの目を見て言葉が出なくなる。

（竹内の回想おわり）

○ 刑務所・医務室内

竹内（29）、ベッドの上でゆっくりと目を覚ます。

看護師が点滴の片付けをしている。

看護師「終わりましたよ」

竹内「ありがとうございますございました」

と、起き上がる。

刑務官が入ってきて、

刑務官「面会者が来てるぞ」

竹内「誰でしょうか？」

刑務官「（書類を見て）高橋湊だ」

竹内、大きく目を見開く。

○ 同・面会室

高橋（23）、硬い表情でガラスをじっと見つめる。

ドアが開いて刑務官と竹内が入ってくる。

高橋、竹内の動きを目で追う。

竹内、椅子に座ってから、

竹内「（冷たく）何しにきた」

高橋「弟が会いにきたってのに、他に言うことねーのかよ。あるよな？」

竹内「……お前には関係ない」

高橋「（感情的に）ふざけんな！ 苗字が変わっても、家を引越しても、何をして

も！ 俺とお前が兄弟ってことは変わらんないんだよ！」

高橋、上がった息を整える。

竹内「悪かったな。俺みたいな犯罪者が兄弟で」

高橋、拳を握りしめる。

高橋「悪いと思ってるなら……なんでやってもないこと認めただよ！ 母さんは、最後まで魁のこと信じて死んだんだぞ!? なのに……簡単に折れてんじゃねえよ！」

竹内「俺は親不孝な口クでもないやつなんだよ。だからもうほっといてくれ。俺に関わ

るな」

と、立ち上がる。

高橋、唇を噛み締める。

刑務官が竹内を連れて部屋を出ようとする。

高橋、立ち上がってガラスまで駆け寄る。

高橋「俺は諦めないからな！ 必ず冤罪を証明してやる！ だからそれまで絶対死ぬんじゃないぞ！ バカ兄貴！」

と、叫ぶ。

竹内、俯きながら振り返らずに出て行く。

○同・独房

竹内、壁に背を預け、床に座る。

○（竹内の回想）警察署・取り調べ室

竹内（20）、椅子に座らされ、その前には刑事が2人。

竹内「俺は本当に何もしてません！ たまたま通りがかっただけなんです！ そしたら、家から出てきた阿部とぶつかって……」

刑事1、机を強く叩く。

刑事1「デタラメ言っただけじゃねえぞ！」

竹内「デタラメなんかじゃない！」

と、意思を持った眼差しで刑事を見る。

○（竹内の回想）警察署・取り調べ室（夜）

竹内（20）、椅子に座らされ、その前には刑事が2人。

竹内は疲れた表情で、目の下にはクマができています。

竹内M「夜通し行われた取り調べの中で、段々自分自身の記憶に自信がなくなってきた。俺が見たものは全部俺の妄想で、本当は全て俺がしてしまったことなんじゃないかと……そう思ってしまいうくらいに、俺は限界だった。そして次の瞬間、とうとう俺の心はぼつきりと折れてしまった」

刑事1「（論すように）お前のお袋さん、事故で亡くなったらしいな」

竹内「え……？」

刑事1「赤信号で渡ってたところをはねられて、即死だったとよ」

竹内、目を見開いて呼吸が乱れる。

刑事2「それほど精神的にも身体的にも追い詰められてたんだろうな」

竹内「（震える声で）弟は……？ 湊は!？」

刑事1「さあ？ 引き取ってくれる親族がいればいいけどな。いなければ施設行きだろう」

竹内、生気を失った虚な目。

刑事2「お前が本当のことを話さない限り、世間ではずーっとニュースが流れて、お前の弟は世間に晒され続ける。まだ未成年だろ？ 学校だってあるだろうに、残酷だと思わないか？」

刑事1「お前が認めれば、裁判が始まって、刑が確定する。そしたらそのうち事件のことなんてほとんどの人間が忘れんだ。俺ら

もこんなことしたくないんだよ。もう終わりにしようや」

と、竹内の肩に手を置く。

竹内、俯いて膝の上で拳を握りしめながら、

竹内「（小さく）俺が……俺がやったのかも
しれません」

（竹内の回想終わり）

○刑務所・独房

竹内（29）、小窓の外を見ながら、

竹内「（泣くのを堪えながら）そうだ湊……
誕生日おめでとう」

○川沿い・土手

高橋、階段に座り、虚な目で川を眺めている。

○（高橋の回想）アパート・外観（夜）

T「9年前」

団地の一棟。

○（高橋の回想）同・竹内家（夜）

高橋（13）、制服姿で帰ってくる。

部屋の中は電気がついていている。

竹内（20）が顔を覗かせる。

竹内「おかえり」

高橋「また来たのかよ」

竹内「いいだろ別に。母さん肉じゃが作って

くれてるぞ。食うだろ？」

高橋「……食う」

高橋 M「うちは母子家庭だったから、母さんが朝から晩まで毎日働いていた。高校を卒業して、隣の古諏訪町にある自動車整備工場に住み込みで働くようになった魁は、家に1人になる俺を気にして、よくうちに帰ってきていた」

高橋と竹内、椅子に座ってご飯を食べる。

高橋「俺のことはいいって言ってんじゃん。

いつもいつも暇かよ。もしかしてまきちちゃんにフラれた？」

竹内「フラれてねーわ！ ラブラブだわ！

お前も早く彼女できるといいな。恋愛相談ならいつでも乗ってやるぞ！」

高橋「……恋愛とか興味ねーし」

竹内、楽しそうに笑う。

竹内「そうだ、俺明日仕事休みなんだよ。夜何食いたい？」

高橋「（呆れながら）食べてる時に聞くことかよ」

竹内「それもそうだな」

高橋「（ボソツと）……オムライス」

竹内「ん？」

高橋「久しぶりに魁のオムライスが食いたい」
竹内、ニコツと笑って

竹内「よしよし兄貴が作ってやるからなー」
と、高橋の頭をワシワシ撫でる。

高橋「（照れ臭そうに）やめろって！」

高橋M「思春期ど真ん中だった俺は、突っか

かりながらも、本当は嬉しかったんだと思う」

○（高橋の回想）同・竹内家（夜・日替わり）

高橋、ドアを開けて帰ってくる。

しかし部屋の中は真っ暗。

高橋「魁……？」

部屋の電気をつけると、キッチンには切りかけの野菜。

高橋「どこ行ったんだよ」

と、椅子に座る。

時計は19時20分を指している。

× × ×

時計は20時を指している。

高橋、固定電話から電話をかける。

しかし、応答はない。

高橋、電話を切る。

高橋「もう知らね」

高橋、キッチンで作りかけの料理の続

きをする。

× × ×

高橋、机に2つの皿を並べる。

皿にはボロボロの卵に包まれたオムラ

イス。

ひと口食べて、顔を顰める。

高橋「……マズ」

高橋 M「それから、魁がうちに帰ってくるこ

とはなかった……」

○（高橋の回想）中学校・教室内

高橋、自席に座っている。

クラスメイトは高橋を見ながらヒソヒ

ソ話している。

担任が扉のところまでやってきて、

担任「竹内！」

と、呼ぶ。

クラスが静まり返る。

担任「ちよっと来てくれ」

高橋、担任と教室を出る。

○（高橋の回想）同・廊下

担任、周りに聞こえないように、

担任「お兄さんが逮捕されたらしい」

高橋「えっ……なんで!？」

担任「これから移送されるって。お前、とに

かく今から古諏訪警察署に行つてこい！」

高橋、真っ青になって走り出す。

○（高橋の回想）古諏訪警察署・前

高橋、自転車で警察署の前に着く。

署の前は野次馬や報道陣が詰めかける。

高橋、人混みをかき分けて一番前に出

る。

竹内が警察官に連れられて車に乗り込

むところ。

高橋「魁！」

と、叫ぶ。

竹内、声に気づいて高橋の方を見る。

高橋「（口パクで）ごめんな」

と、車に乗り込む。

人混みの間を車が出発する。

高橋「クッソ！」

高橋、自転車で車を追いかける。

○（高橋の回想）川沿い・道路

車道を走る車の後ろを高橋が自転車で追う。

全力でペダルをこいでいる。

しかし、小石のせいで道を外れ、自転車ごと土手を転がっていく。

○（高橋の回想）同・土手

自転車から吹っ飛び土手の下で倒れている高橋。

額が切れて血が流れている。

高橋、地面に伏せながら拳で地面を殴り続ける。

高橋「くそっくそっくそっ。魁が何したって言うんだよ！！」

と、地面に向かって叫ぶ。

（高橋の回想終わり）

○川沿い・土手（夕方）

川が夕陽に照らされてオレンジ色に染まっている。

高橋（23）、無表情で立ち上がる。

○高橋家・玄関（夕方）

高橋、玄関で靴を履く。

高橋正雄（69）、玄関まで見送りにくる。

高橋正雄「泊まってくればいいじゃねーか」

高橋「（覇気のない表情）いや、いい。叔父

さんの顔見れたし」

と、扉を開ける。

高橋正雄「おい湊」

高橋、振り返る。

高橋正雄「お前ら兄弟の帰る家はここにちゃんとあるんだからな。いつでも帰ってこい」

高橋、力なく口角を上げて家を出て行く。

○交差点（夜）

赤信号で高橋のバイクが止まる。

高橋、ハツと思い出したようにスマホを見るが、充電が切れていて電源がつかない。

※ ※ ※

（フラッシュ）

理菜「湊くん11月1日空いてる？ 空いて

るよね、絶対空けといてね！」

と、ニツコリ笑う。

※ ※ ※

高橋M「ごめん、理菜……」

青信号になり、バイクを発進させる。

○アパート・理菜の部屋の中（夜）

部屋には鈴木理菜（18）、親友・花村

夏凜（18）、親友・市川拓也（1

8)、同級生・西原圭吾(18)、成宮翔(18)がテーブルを囲んで座っている。

テーブルの上には飲み物やピザが並ぶ。

理菜「先に食べよっか！」

と、沈黙を破る。

夏凜「で、でも湊くんもう少しで帰ってくるかも！」

理菜、首を横に振る。

理菜「(明るく)冷めちゃったら美味しくな
くなっちゃやし。湊くんにも連絡入れとい
たからいいよ！」

西原「(察して)湊くんが帰ってきたら、ま
たなんか買いに行けばいいか！」

夏凜「だね！ ケーキもあるし！ 先に始め
よっか！」

理菜、無理に笑顔を作っている。

市川「(小声で)何やってんだよアイツ……」

○同・玄関(夜)

理菜「今日はごめんねみんな。気をつけてね」
夏凜「また仕切り直ししようよ！」

成宮「お邪魔しましたー」

西原「おやすみ」

と、帰っていく。

残った市川、

市川「あんま心配しすぎんなよ。多分スマホの充電切れとかそんなオチだろうから」

と、フォローする。

理菜「うん。ありがと拓也」

市川「じゃ」

理菜、手を振ってドアを閉める。

○同・理菜の部屋の中（夜）

理菜、スマホを持って心配そうに部屋の中を行ったり来たりする。

インターネットで「高速 事故 速報」

「バイク 事故 長野」と検索するが、

何も出てこない。

○同・2階の共用廊下（夜）

理菜、手すりの所から心配そうに遠くを見ている。

するとバイクの音が近づいてきて、アパートの下に高橋の乗ったバイクが帰ってくる。

理菜「湊くん！」

と、階段を下りる。

高橋「（呆然として）理菜……」

理菜「良かった……事故にでも遭ったんじゃないかと思って心配したよ」

高橋「ごめん……間に合わなかった。約束したのに……充電死んでて、スマホの。連絡できなかった……」

と、支離滅裂。

理菜、高橋の手をそっと握って、

理菜「湊くんが無事ならいいよ。おかえりな

さい」

高橋「……ただいま」

高橋の腹がぐうぐうと音を立てる。

理菜「ご飯食べてないの？」

高橋「うん」

理菜「良かったら一緒に食べない？ 簡単な

もので良ければ作れるよ」

高橋、頷く。

理菜「じゃあ早く入って入って」

理菜、高橋の手を引いて階段を上る。

○同・理菜の部屋の中（夜）

理菜「すぐ作るから適当に座ってね」

理菜はキッチンで準備をする。

高橋、ソファに座ってポーツとする。

机の上の写真に目が留まる。

理菜が子供の頃に両親と鈴木夫妻と撮

った写真。

高橋、無表情で見つめる。

理菜「できたよ」

理菜、オムライスの乗った皿を2つ持

ってくる。

高橋、オムライスを見て眉を動かす。

理菜「もしかして、オムライス嫌いだった？」

高橋「……いや」

理菜「良かった！　さ、食べよ」

理菜と高橋、ソファに並んで座る。

高橋、手を合わせて、

高橋「いただきます」

理菜「どうぞ」

高橋、ひと口食べ、黙々と食べ進める。

理菜「（おそろおそろ）味、大丈夫かな？」

高橋、顔が見えないように下を向きな

がら、ただ頷く。

鼻を啜る音が聞こえて、

理菜「（慌てて）大丈夫？　もし口に合わな

かったら全然無理しないでね！」

高橋、首を横に振る。

高橋「……美味しいよ、超美味しい」

高橋、唇をかみしめる。

理菜、高橋の背中を優しくトントンと

する。

理菜「何があったか分かんないけど、大丈夫。

湊くんは1人じゃない。私も、夏凜もニッシーも成宮くんも。素直じゃないけど拓也も。みんな湊くんの味方だよ」

高橋、苦しそうな表情で頷きながら、

高橋「……ありがとう」

と、膝の上で拳を握りしめる。

理菜「そうだ。デザートにケーキもあるからね！」

高橋、頷いてオムライスを食べ進める。

× × ×

電気を暗くして、理菜が蝋燭の火が灯ったケーキを持ってくる。

理菜「ハッピーバースデートウユー、ハッピーバースデートウユー。ハッピーバースデーア湊くん。ハッピーバースデーユー。おめでとー！」

高橋、フーツと火を消す。

理菜、拍手しながら電気をつける。

理菜「これね、みんなからプレゼント」と、酒の箱を渡す。

高橋「もしかして」

理菜、笑顔で頷く。

理菜「開けてみて！」

高橋が開けると、中にはウイスキー。

高橋「これ高かっただろ……？　ありがとう」

と、口角を上げる。

理菜「あとこれね……私から」

と、ドキドキしながら小さな箱を渡す。

高橋「開けてい？」

理菜、緊張しながら頷く。

高橋が小さい箱を開けると、中にはピ

アス。

理菜「アクセサリーなんてあげたら重いかな

って思ったんだけど、でもこれ見た瞬間絶

対湊くんに似合うだろうなって、気づい

たら買っちゃった。いらなかったら売っ

ちやっついていいから！」

高橋「嬉しい。ありがとう」

理菜、嬉しそうに笑う。

高橋「付けてくれる？」

理菜「うん！」

理菜、1つずつ高橋の耳にピアスを通す。

両方つけ終わる。

理菜「はい、できた」

至近距離で見つめ合う2人。

どちらも目を逸らさない。

高橋、理菜の手を握って見つめる。

高橋M「理菜、俺はさ。全然いい人なんかじゃないんだよ。理菜を利用するために近づいた。ストーカーから助けたのも、バイトに誘ったのも。理菜のためじゃなくて、全部俺の都合」

理菜と高橋、徐々に顔が近づいていく。

高橋M「本当のことを知ったら理菜は傷ついて、きっと俺のこと軽蔑するだろうな」

高橋、理菜の後頭部に手を回し、引き

寄せて口付ける。

角度を変えながら深くなる口付け。

理菜、繋がれてない方の手で高橋の服

の裾を握る。

高橋、ゆっくりと理菜を押し倒し、服の中に手を入れようとしたところで動きを止める。

理菜「？」

高橋「……（ボソツと）ごめん」

高橋、体を離して理菜を起き上がらせる。

理菜「湊くん……？」

高橋、目を逸らして、

高橋「……ごめん」

と、言い残して部屋を出ていく。

残された理菜、床に座ったまま呆然とする。

（了）